松本市森林再生市民会議　第２回運営委員会　議事録要約書

日時　令和４年９月２７日（火）
　　午後７時００分～９時００分
場所　松本市勤労者福祉センター３階
　　３－１会議室

～ 議事概要 ～

(1) ビジョンの位置づけについて

- 市民会議がイベントやフォーラム等市民との交流・市民への周知を経て、現状の関連計画との整合を図りながらビジョンを策定していく。
- ビジョン策定後は、徐々に関連計画への反映も図りながら、実際の取組として実行に移していく予定。
- 森林に求められる機能もビジョンに関連付けて策定していく方針。

(2) ビジョンに向けて必要な検討事項

- 気候変動は全市民に関わる問題であり、CO_2の削減など森林が貢献できる部分も大きい。そうした状況から、気候変動問題に対応した「ゼロカーボンシティ」の実現を一つの軸にしてビジョンを考えていけば整理しやすい。
- ビジョンで取り上げる「市民」については、空間軸、時間軸、関心軸の 3 軸（3 次元）で整理すると分かりやすい。
- 市民の意見を無視する形でビジョンの策定を推し進めていくのは良くないという共通理解が大切である。
- 森林を利用する人間の生活スタイルの変化も加味し、森林とはそもそもどういうものなのかという原点に立ち返りながら、新しい形の森林の作り方を模索しなければならない。

(3) イベントについて

- 初年度となる今年度（令和 4 年度）は、委員が勉強する要素も取り入れながら、市民の方々に参加いただくという 3 回のイベントが良い。
- イベントに参加した市民が様々な意見を交換することが大切で、そこでの意見をしっかり記録して、それらをまとめた結果として最後にフォーラムを開催する方向性が良い。
- 先行事例による知見をこちらから積極的・意識的に情報収集し、連携・アプローチしていく努力をした方が良い。
- 第 1 回と第 2 回のイベント実施内容と担当委員を以下のように決定。
  - ・第 1 回（美鈴湖キャンプ場周辺の森林）：香山委員、菊地委員、渡辺委員
  - ・第 2 回（林業現場）：小山委員、永原委員、小口委員
  - ※日程と詳細内容については、担当委員を中心に検討

（市）
本日、第 2 回目の運営委員会を開催する。三木委員長からご挨拶願いたい。

（三木委員長）
今回は第 2 回ということで、より具体的な内容についてみなさんと一緒に考えていきたい。21 時までということで時間が限られているため、集中して審議に参加していただければと思う。

（市）
ビジョン作成支援の受託業者である環境アセスメントセンターから自己紹介をお願いしたい。

（環境アセスメントセンター：美馬）
今日は美馬、吾田、水上の 3 名で伺った。3 年間の長い取組となるが、松本市の森林の未来像を描いていく素晴らしい業務と捉えている。まずは、こちらで作成した資料に沿って、お手伝いさせて頂く内容をご説明させていただきたい。
※資料 1 の説明（省略）

（市）
環境アセスメントセンターには今後この運営委員会やイベント等に参加いただき、一緒に関わっていただくことになる。ここからは三木委員長に進行をお願いしたい。

（三木委員長）
まず、会議事項の 1 番目の「ビジョンの位置づけ」について、市民会議スケジュール案とともに資料 2 も確認しながら、事務局から説明願いたい。

（市）
最初に挙げさせていただいた「森林に求められる多面的機能」は、今後避けて通れない要素になると思われる。提示した内容は林野庁のものになるが、ビジョン策定の上でも参考になると思われる。
森林長期ビジョンの位置づけとしては、市民会議がイベントやフォーラム等市民との交流・市民への周知を経て、現状の関連計画との整合を図りながら策定していくこととなる。策定後は徐々に関連計画への反映も図りながら、実際の取組として実行に移していく予定としている。

（三木委員長）
今日やることは大きく 2 点ある。一つは「ビジョンにむけて必要な検討事項」である。例えば、アンケートを実施するにしても漠然とした内容では意味がなく、ビジョン策定のために必要な内容でなければならないため、その具体的事項を検討しておく必要がある。
もう一つは「イベントについて」で、少なくとも今日の会議では今年度予定している 3 回のうち 1 回目と 2 回目までは決めておければと思う。進め方として、イベントごとに委員の中から担当の運営委員を選出し、具体的内容を検討していければと考えている。

まず「ビジョンにむけて必要な検討事項」から検討を進めていきたい。この運営委員会は、原案が市から提示され、それに対して我々が意見を述べるような進め方ではなく、委員自身が自ら考えていくことを前提としている。とは言え、更地の状態から議論するのは難しいと考え、私と副委員長で検討し、必要と思われる項目を列挙させていただいたものが資料 4 になる。これを元に皆さんのアイデアで項目を削ったり追加したりしていければいいと考えている。

もう一つ、資料 3 として、松本市の森林全体の概況図を副委員長に準備していただいた。これも後で解説していただきたいと考えている。

まず資料 4 から説明したい。長期ビジョンとして 50 年後の森林ということであるが、これから 50 年先を考える中間点として 2030 年と 2050 年があると思っている。松本市でも「まつもとゼロカーボン実現計画」と「松本市役所ゼロカーボン実現プラン」として提示されており、この中でも森林に関係する内容が盛り込まれており、木質バイオマスエネルギーを使って CO_2 を削減していく、環境教育を推進していく、脱炭素型のまちづくりを推進していくことが掲げられている。気候変動問題は全市民が関わる問題で、例えば雨の降り方が異常になって我々の生活そのものに影響してきており、森林がこういった問題に貢献していかなければならないと考えている。そうした中で、「ゼロカーボンシティ」の実現を一つの軸にして考えていけば整理しやすいのではないかと思っている。

松本は周辺を森林に囲まれその中心に市街地があり、森林資源を活かす形でゼロカーボンシティのモデルとして取り組んでいく姿が想像される。例えば、木質バイオマスの安定利用や、建物の高断熱化とあわせた木質化の推進、それらを進めていく上での安定的な資源供給、「グリーンインフラ」としての森林などのイメージを膨らませたいところである。例えば、住宅やオフィスの木質化、温泉のチップボイラー化、次世代への引き継ぎ、市民が利用できる森林空間（フットパス）などが挙げられる。

我々委員自身が勉強したり、環境アセスメントセンターの援助も借りながら必要な資料を作成したり、アンケート調査をしながら、「ビジョン」を作成する上で必要なことを具体化していかなければならないと考えている。

次に資料 3 について清水副委員長から説明をお願いしたい。

（清水副委員長）

資料 3 の地図に示した黄色と緑は、林業が可能な樹種、つまりそれぞれカラマツとスギ・ヒノキ等を表している。カラマツは市街地から離れた高標高で急傾斜の立地にある傾向が高い。アカマツや広葉樹は、昔農地だった場所が森林化した場所が多い。中心部は市街地で、全人口の 7 割近くがここに集中していると伺っている。

（市）

東西両端の色が塗られていない場所は全部国有林である。カラマツは昔に高標高まで植えられたが、そこが現在も林業適地かというと微妙なところがある。四賀地区はアカマツが非常に多い状況が見て取れる。

（永原委員）
　奈川地区では、国有林のほとんどはカラマツとみて良い。また、上高地もカラマツが多く、高樹齢の天然カラマツとみられるものが多く見られる。

（清水副委員長）
　スギ・ヒノキは場所が限られている。一方で、アカマツ、カラマツは出荷量を確保できると思われるが、木材としての価値はどの程度あるのか。

（永原委員）
　両種とも需要は十分ある。カラマツは合板材としての需要があり、スギやヒノキに比べて強度があるため合板材の一番外側に使われることが多い。年間を通して需要もあり、値崩れもしにくい。アカマツは全国的に見ると希少種になってきているため、かなりの高額が付く場合もある。

（清水委員長）
　林野庁が推し進めている建物の木質化でも、強度が分かる集成材の合板は需要があるとの情報を得ているが、そういった面でもカラマツの合板材は利用できると考えてよいか。

（永原委員）
　是非使ってほしい。長野県としても木材の強度をもっとアピールしても良いのではないかと思っている。スギ、ヒノキに比べるとカラマツは約 3 倍の強度がある。またカラマツは、高強度の特徴のほかに腐りにくいという特徴もあり、土木分野でも利用価値が高いのではないかと思っている。

（清水副委員長）
　カラマツは、材積の面から十分と見て良いのか。

（永原委員）
　量としては充分あると判断して良いと思われる。

（三木委員長）
　ビジョンとして「こういうことを考えておかなければならないのではないか」というものがあれば、お願いしたい。

（小山委員）
　第 1 回の運営委員会で、そもそもこのビジョンで取り上げる「市民」とはどういった人たちをイメージするのか議論になったが、途中段階となってしまった。問題提起いただいた菊地委員から何かご意見いただけないだろうか。

（菊地委員）

（持参資料の図で説明しながら）空間軸、時間軸、関心軸の 3 軸（3 次元）で整理すると分かりやすいのではないかと考えている。まず空間軸については、普段接している森林との地理的・物理的距離を示しており、例えば中心市街地に住んでいる人と山の中に住んでいる人とでは普段の接し方も異なってくる。時間軸については、例えば 60～70 代の方々は幼少期に森林と接している原体験のようなものがあり、一方で 10 代の方々は学校教育の中で森林をフィールドとした学習の機会がある。その間の 30～40 代が森林との関わりが比較的希薄といったような構図があり、今という時間で見ればそういった切り取りができる。これが 50 年後になるとどうなるのかといった視点や、50 年後を考える時には 50 年後に生まれてくる子供たちのことも想定しなければならない。時間軸は結構重要な視点になってくると思っている。関心軸については、必ずしも普段住んでいるのが街なかだから森林に興味がない人たちが多いかというと、そういう訳でもないと思う。逆に普段から森林の中に住んでいるはずなのに森林に対して興味のない人たちもいて、アプローチの方法が変わってくると思われる。

今後、イベントやフォーラムの内容を検討していく際も、この 3 軸を常に気に掛けながら進めて行く必要があるのではないかと思っている。

（清水副委員長）

アンケートについて、森林への意識や関心というテーマでアンケートを実施して、例えば居住エリア、世代、森林所有の有無などの要素を盛り込んで、多変量解析等で類型化することは可能か。

（環境アセスメントセンター）

類型化まで行かなくとも、松本市では森林への関わり方が人によって様々であると想定されるため、住んでいる地域ごとの意見や年代別の森林に対する期待等といった整理はできると考えている。また、所有者に対しては、所有に対する負担や悩み、次世代への継承といった点も聞き取れるのではないかと考えている。

（清水副委員長）

人によって森林に対する関心やイメージは異なっており、所有者とそうでない人との間にも大きな隔たりがあると思っている。今後アンケート調査をどう進めていくか、どういった取りまとめができるか、改めてご相談したい。

（環境アセスメントセンター）

色々な整理ができると良いと考えているので、ご指導いただきながら進めていきたい。

（香山委員）

この森林ビジョンは何年（20XX 年）までに達成するといったタイプのものとは違って、例えば 50 年先の将来像を描くのであれば、いつでも 50 年先を見ているといったタイプのものを作っていく必要があると思っている。人間の世代交代と森林の世代交代は時間がずれるので、この点も

見据えたビジョンの作成が必要であると思っている。

（小山委員）
　ビジョン策定の計画が持ち上がってきた背景を辿ると、そもそも松枯れの問題に端を発している。この松枯れの問題に対して最初に声を発したのが森林所有者ではないという点がほかの地域とは異なっている。一番声を上げたのは市街にお住まいの皆さんで森林所有者ではないという点に注目する必要があり、その理由としては、これまでと周りの景色が変わってしまったことに対する違和感であろうと思われる。こういった意見を無視する形でビジョンの策定を推し進めていくのは良くないという共通理解が大切で、そうしないと主に森林所有者に焦点を当てたような内容になってしまうおそれがある。仕事として森林に関わっている人とそうでない人、内の眼と外の眼の両方に寄り添っていくことが重要であると思われる。

（菊地委員）
　「20XX 年までに目標を達成するため、単年度ごとでは何々まで達成する」といった形で行政は計画を推し進めていくため、“常に 50 年先を見つめる松本市民”といったスタンスは難しいかもしれない。どちらかといえばこういったスタンスは市民憲章に近いかもしれない。

（永原委員）
　四賀地区等の松枯れの状況は山が壊れている状態で、回復を図ろうにも人手が全然足りない状況である。人手を増やしていかないことにはどうにもならないのではないかという実感がある。

（香山委員）
　松本の場合、森林は植林により形作られてきたという歴史があって、植林した人工林あるいは里山として利用してきた森林が壊れているという現状がある。森林という大きなシステムを人間がある時代に利用してきた成果であって、それが壊れている。なぜ壊れているかというと、利用する人間の側のシステムが変わってしまったという要素が非常に大きい。これを元に戻すのは人間側としてもとても対応できない。であれば、森林とはそもそもどういうものなのかという原点に立ち返って、新しい形の森林の作り方を模索しなければならない。盛んに造林してきた時代に戻すのは絶対無理である。人口も減少し生活のスタイルも変わっていく状況も加味していかなければならない。

（清水副委員長）
　小山委員に質問で、過去の会議で神戸大学の黒田先生がお見えになり、「松本市のアカマツ林はすでに広葉樹化しているところもあるので、林相転換したほうが良い」というような話があったかと思うが、そのあたりの様子を教えてほしい。

（小山委員）
　先ほど永原委員からもあったとおり、これまでどおりの林業が成立する形を模索するなら、現在のままではとても人手が足りない。実際に長野県内で林業に従事しているのは 1,500 人しかい

ない状況である。林業に従事している方がここには 2 人いらっしゃるが、すごい確率ということになる。昔であれば、このぐらいの確率で林業従事者がいたということになるが、そういう時代に作られた森林が今の松本市の森林を形作っているということになる。神戸大の黒田先生は、四賀のアカマツ林を見学された際、「上層は昔植えたアカマツがあるが、下層はすでに次の世代の木が育ってきている。上層のアカマツには遠慮いただいて、下層の木で新しい森作りをするのも選択肢の一つである。」と発言されたが、そうすると、今までの手入れの方法は踏襲しなくても良いということになってくる。林業従事者が少ない状況で次の選択肢として何が考えられるのかということを丁寧に考えていくのがこのビジョンであると思う。

（小穴委員）

私は NPO 法人の活動として松本市の森林で作業する機会が多く、先日、市内の中学 3 年生 50 名ほどを対象に浅間温泉の御殿山で森林での体験活動を行った。中学生にもなると、半日程度の時間どうやって過ごすかきちんと計画を立てて行動できることがよく分かった。場所さえ提供し、安全管理の面に注意すれば自主的な活動が十分できるということを強く実感した。そんなに難しいことを考えずに、こういった形で教育活動の一環として取り組むのもやりやすい方法ではないかと思う。

（三木委員長）

ビジョンをまとめる際に、子どもたちの遊び場や教育の場として利用できる森林を確保するという点は盛り込めると思うし、長期的な視点で計画的にそういった森林を設けたほうがいいとも思う。他の分野でも、どういうことをどういうふうに書くか考えていきたい。いつも 50 年先を見続けるという点はたしかに大切ではあるが、まとめる側の視点からすると、ある程度目標がないと組み立てにくいかもしれない。アカマツが枯れた後の森林をどういうふうに成立させていくか、どういうふうに使っていくかは、ある程度具体的な目標を置いておかないと現実的な森林の姿に結びついて行かないかなと思っている。

（清水副委員長）

森林の現状がどうなっているか、どう計画していくのかということを把握されているのはどなたになるか。

（永原委員）

市内のアカマツはほぼマツクイムシの被害にあっている状態で、残っているところもいずれは枯れてしまうのではないかと予想している。ただ、今後どうするのかは決まっていない。道路など生活インフラに近い場所では、安全管理の面から伐採が進んでいる。それ以外の場所では、アカマツにも値段が付かないため採算が取れず危険でもあることから、正直なところ手が付けられない状況である。自然の遷移に任せて広葉樹林化を図るという方向性が考えられるが、成立するまでかなりの時間がかかるため、それまでどうするのかという問題がある。

（小山委員）
今の森林をどう見ていいのか。菊地委員から提案のあった「人の 3 軸」の見方に対して、「森の 3 軸」の見方もあるのではないか。つまり、樹齢、樹種、森への関心度（どのレベルまで手が出せるのか）の面からの見方である。

（清水副委員長）
我々は思っているほど松本市全体の森林について把握しているとは言えないし、市民、山林所有者の考えていること（森林観）を把握しているとも言えない。分からないことだらけなので、森林の状況の把握、アンケート調査などを通じて市民の皆さん意見を聞き取る必要がある。
また、対面で市民の皆さんに直接触れることで得られる体感的な把握というのがある。物ごとには人と人とが対面で直接触れ合って考えていかないと実現しないことがたくさんある。対面でイベントを実施するという点はとても大事で、何を知りたいかを軸にイベントの内容を考えていくとより確かな情報が得られ、知識が身になるのではないかと思っている。とりあえずイベントをするというスタンスで、予備調査に相当する位置づけと思って実施していただければ良いのではないか。どういう方々が参加されてどういう考えを持っておられるのかということと、情報収集整理やアンケート調査の結果とを整合していくことが大事かと思っている。1 年目はそういう流れにしないと情報が得られないのではないかと思っている。

（菊地委員）
イベントは 3 回やらなければならないのか。それと、この時期にやらなければならないのか。やらなければいけないのであれば、その論拠も示してほしい。

（小山委員）
この委員メンバーが集まるのをイベントとして扱ってはいけないのか。これだけ委員から広い意見が色々出ている中で、何かやらなければいけないということであれば、全員のコンセンサスを得ることも大事である。例えば、小穴委員のフィールドに委員メンバー全員で行ってみて、まずはそこで目の前の森を見ながら委員皆で考えてみるというようなファーストステップでも良いのかなと思う。

（市）
市民と森林との距離が遠いという現状を踏まえ、市民を森林に呼び込もうという観点からイベント実施の話が出てきている。今回、6 月補正予算でイベントを 3 回、フォーラムを 1 回ということになっているため、イベントについては是非 3 回実施していただきたい。イベントの内容は色々考えられると思うが、今年度に限らず来年度もイベントは実施していく予定であるので、今年度実施出来なかった内容は来年度実施することも可能である。事務局の想定では 10 月頃からイベントが実施できれば良かったが、少し時期が遅れてきている。冬は、なかなか森林に来てほしいと募集しても難しい部分があるため、木材の利用見学等も含めて委員の皆さんにご検討いただけるとありがたい。

（菊地委員）
　回数については納得できた。内容については、委員メンバーの勉強会やスタディーツアーのようなものに 3 回のうちの 1 回、もしくは初年度の 3 回とも充てるということでも説明は付くという解釈で良いか。

（市）
　委員メンバーのみでの開催は難しいと考えている。1 回のイベントでは、30 人程度の市民の参加を想定している。

（三木委員長）
　手法として、我々委員が参加しないイベントを開催しても仕方ないと思う。我々自身が見に行くということをしないと、市民と委員で見ているものが違うと話がまとまらない。我々委員が参加したいイベントを開催する必要があると思う。日程調整については、少なくとも初年度は委員の空いている日程を優先して良いと思う。ただ、委員だけでイベントを開催する訳にもいかないので、外部から市民の参加者を募らなければならない。ここで難しいのは、委員が学ばなければならないことと、一般市民が参加して面白いと思うこととの折り合いを付けていくことかと思う。

（清水副委員長）
　昨年度に三木委員長、香山委員、小山委員、渡辺委員で書かれた報告書を拝見したところ、松本市の色々な政策に森林が関係していることが分かった。三木委員長に一番関係が深い政策は何かとお聞きしたところ、「ゼロカーボン」と伺った。このゼロカーボンを基軸にして、松本市の森林の施策にフィックスするということは可能かどうか、三木委員長からご説明をお願いできないか。

（三木委員長）
　現在、色々な市町村がゼロカーボン宣言を出しており、松本市も気候危機宣言を出して率先して対策を取らなければならないということで決定されている。ゼロカーボンの内容自体は森林だけに留まらないものの、森林が貢献できる点は色々ある。また、森林への関心が低い市民にもゼロカーボンの視点から捉えると森林との繋がりが分かりやすいという点もあると思う。「温室効果ガスは削減したい、だからチップボイラーを導入しよう」など、多くの方々はこのような関わり方で全然良いと思っている。ゼロカーボンをベースにすると松本市の森林の将来像や市民の関わり方を提案しやすいのではないだろうか。イベントの内容として、チップボイラーの見学なども考えられる。特に厳冬期に森林に行くのは特に市民も交えてとなると難しいので、チップボイラーの見学などは適していると思われる。

（香山委員）
　美鈴湖キャンプ場周辺の森林は林業が盛んで非常によく整備されている。また、ひどい松枯れも起こっておらず景観的にも良いことから、最初の開催地としては適しているのではないだろうか。開催するのであれば、冬期は行くのが難しくなるので雪が降る前がよい。冬期には、例えば

竜島温泉のチップボイラー見学や木材利用見学などが考えられる。

（清水副委員長）
美鈴湖周辺の森林には市街地を取り巻く森林も多く見られるので、市民が身近に感じる森林としては見やすいと思う。安全性を考えて整備されているという点も開催地としてふさわしい。他には、委員の協力を得ながら木材を展示するといったイベントも考えられると思う。

（小山委員）
委員が勉強する要素も取り入れながら、市民の方々をご案内するという 3 回のイベントが良いのではないか。そうすると、先ほどご提案のあった美鈴湖周辺の森林の見学、林業現場の見学、竜島温泉のチップボイラーなど林業で発生した木材を利用する現場見学といった 3 回で 1 年目は始めてみるというのはいかがだろうか。

（渡辺委員）
インプットしたらアウトプットすることも大切だと思う。例えば、見学した後にある程度の人数のまとまりで焚き火を囲んで情報共有や意見交換する場も設定できれば良いのではと思う。

（香山委員）
昨年の実行会議で考えていた点を思い返すと、市民会議本体がイベントに当たる。ちなみに、この場は市民会議を運営する委員会という位置付けになる。イベントに参加した市民が様々な意見を交換することが大切で、そこでの意見をしっかり記録して、それを 3 回分まとめた結果として最後にフォーラムで集約するという流れになると思う。

（三木委員長）
市民の中に次の森林のことを考えていく方、発信していく方が参加していただけるとなお良いと思う。また、10 代 20 代の市民の方々も是非呼び込んでいきたい。

（小山委員）
他の市民グループで参加者を集めていく時の良いアイデアなどあればお聞きしたい。私の職場では、松枯れや獣害をテーマとして高校生の自主研究を受け入れている。森林に対して興味のある学校へのアプローチも有効ではないだろうか。

（菊地委員）
学校であれば、県ヶ丘高校や信大付属中学校、本郷小学校あたりが思い当たる。これらの学校に限らず、市内の小・中・高校に対して教育委員会とも連携しながらアナウンスしていけると良いのではないか。森林に関連して活動している人達は大勢いるものの、それぞれ個別に活動しているのはもったいないということはいつもよく感じる。伊那市の伊那谷フォレストカレッジや乗鞍岳のゼロカーボンラボなど各地での先行事例による知見が松本市周辺で蓄積されているはずである。組織が変わると同じことをまたゼロからやろうとするのではなく、先行事例による知見を

こちらから積極的・意識的に情報収集し、連携・アプローチしていく努力をした方が良いのではないか。それをやっていくと、先行事例の活動仲間の間でも松本市の取組みが広まり、イベントへの参加者動員も容易になるのではないだろうか。

（香山委員）
今年度は初年度なので間に合わないかと思うが、来年度以降は持ち込み企画もありという考え方になっている。この中だけで全て考えるのではなくて外部にも発信していかないとやりきれないのではないか。実際にどんなふうにイベントを運営していくのかということを残りの時間で考えて行く必要があるが、リアルタイムでオープンな形での運営方法も考えていけたらと思う。

（三木委員長）
少なくともここでは、第 1 回目と第 2 回目のイベントを担当していただける委員を決めたいと思う。

※担当委員は以下に決定
・第 1 回（美鈴湖キャンプ場周辺の森林）：香山委員、菊地委員、渡辺委員
・第 2 回（林業現場）：小山委員、永原委員、小口委員

（大田委員）
森林から直接楽しさを感じてもらうのが大事だと思っている。問題はたくさんあると思うが、その中のいくつかでも市民の方々に興味を持っていただける場があると、今後も関わっていきたいと思ってもらえるのではないかと思う。イベントなどに参加して関わっていく中で問題を自分ごととして捉えていくような流れになっていけばいいなと思う。

（三木委員長）
伊那市では 50 年の森林づくりビジョンを作ってイベントを行っている。多くの市民にとって森林は用事のない場所なので、例えば「森のマルシェ」という取組みでは、森林の中で出店を作ってコーヒーを飲んだりカレーを食べたり、森林に訪れる用事をわざわざ作ることによって森林に人が来て、そこから森林との接点を作ろうという試みである。この松本市の取組では、まずは我々委員が勉強するところから出発するが、2 年目・3 年目あるいはこのビジョンを作り終わった後の展開も考えると、森林の中で何か市民が楽しいと感じられることを考えていければ面白いと思う。また、他地域で行われている事例の取り込みはとても大切だと思っているので、委員からも是非ご紹介いただきたい。

（市）
イベント参加者の中から将来的には、プレーヤーと言いますか、地域で活動する方、小穴委員さんのような方が一人でも増えていけばよいのかなと思っている。
以上で第 2 回運営委員会を終了する。